環海異聞

九

862
1
51

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

862-1
(51)

環海異聞巻之九

伊尓歌都蛤発軫伯尋琛蒲爾孤道中記

帝國圖書館

帝國圖書館藏

ヒイルコーツカの地に滞留する事已に八ケ年ヘ
星霜を経くいつの時帰郷を思しを云間なれ
く空しく年月を空ふしたりし哀
享和三年
なりし
去の三月始て郷年
ゴロシ
年
より日本

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

漂流人共御国の子孫なり有へ御探し罷
出へき旨仰付られ奉行中源一左衛
十三人御探しに出られ
其御国の子孫に京帝都へ召登る旨命の
飛脚役人召せ下し元仕旨右の人々使ひ
乗出旨也各暑りて已に寒気に向ふ
の用意調ひ次第出発ニコライ彩義も同船
来夏用船有之也いまく出府して死

夏事も可幸此時節なりとコロビニヲ迄送
せし由の京帝都より此度は日本源氏人事
為官位の報中来る事なれは頼出しなて
も出さる国面目なし紀文の法なり是迄
ていろく問答も可し趣みて明年来国せし
は此度日本人より我しくれた法通弁彩義附添
経済なる夏と那ノ世なる中せし始末みて
彩義事皆の者方へ来る事頼中に何也

承諾し各中会一流より此那指出せしハ如何も新
義を新造せるは万端異論合ふも可有之
此爛熟を同人附添ハ仏事の趣を
主中立しより此事ハ仏下知も云々左三府ハ
日本重詞も云々唯道中をもの事ハ何も
此那の趣旨の事ハ間ハ那国渉事ニ中事
ようして新義も陪添完ようなる仏名事
恐る世話更し人々つも列主を告げ旅情調

ひ事七日を賞々此地を発足
従前の量紛の易服并服行出等十二名
婦人旦団を中氏部府ハ何事も自由係
なる色ハ石用の拘ハ此地を費掛の要用の
拘おりかして自性くして可第とあしか
各事をよおる儀ハ婦人ハ時近キセロフ方ハ
ようて家子七自侍も志ようし永く費形
しそ義平の銀子(シコイン)を懐しようしとそ

帰路脚の役人某等人名ハ何ト申キサノラ何とかいふと
説甲双鶴の国号附ることは儀を
禁ゼラレて国ゝハ道中記文強れなるもいかの
あるやうを見て驚くことハ恐も驚ゆ中しハ
漂流人けんを出路脚人くとふ船てこを出と
紀せハ ポポロー チノ」といふ官人のよし公用も
含むて点速ゝ出せりうれハ長脚もん
沒しなくし併数千里の猶行記文地常
せ一ゝ出ハのなゝ彼ゝ俗ゝ出るゝ和の豪
邁の気象剛暴敬とやいふくき

外十三人の者ハニコライ新義附添総合十六人
首途ゝ十三人の者ハ

舵取	九吏
水主	銀三郎
同	民之助
同	辰義
同	清蔵
同	八三郎

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

同　吉六
同　義次郎
同　津吉
同　儀平
同　九平
同　太十郎
同　已之助
煩

同和助をたすけ門を渡るとすぐに車を門内に

まつる後人先車をそ各駕をつれゆきぶら車は
二人乗りまて数七ツ一ツ乗りまて四足馬乗り
按ずるに二人乗りなる也いハ七車まていたるべし
一車まハ三人乗りなり但し後人ハ三人のうち
場合ハ車なる七車と源家号海りと
覚つる也ハ一車ハ三人乗りなるべし
尤驛ゝ継馬なり コロシニテ町年寄ハ町方役也
見送る也

車北上人の家原の図ハ皮張る毛物なり
赤土(アトロ)入口あり手後ハ出に前へ塗もち有る
しかるものて雨天の節いこれをうれ板
さし内ハ人向ひ坐て乗る板車北前
腰を掛る狀より出る馬の口付き人これを腰
をつけ鞍の先(キ)に皮紐を結しうる物を引く
二人より廻し馬足をさきも先(キ)馬の後人家別
あるハ孫をつけて掛け計路の者先(キ)くれ

駅(ヘ)間ゆる加公用の傳馬なりと雖ども
るを引き付き更けて如しも出帳なり且
右ハ小皮袋北綿前もいへき物後
徳より付る人宿へ出る人の為に趣
し扱移遠の車ハ権柄ハ皆之
彼地家車北制石漂客の後く所来国
出きぼ〳〵なりて彩らる国を伺ハ
此日ある人をして大光ハ見問せし免

を参照すべき物にて形状の略を曉（サト）
まり訳略用る物も都府にて用るものと
は精粗の分あるのみにて大概相同じを
中用る物「キビッカ」とゆい都下にて用ふ
物いい「コレイト」と名く乗車は和漢共に両
輪なりを英国は車前の方にて小輪
を前にて敷足のを牽はるを此三輪は
簡便の利あるを依て前の輪は形小之

後は両輪にして大我方の大八車より
稍大なり然るに小輪は後輪の半径
あり此小輪を前にて上に方ばく出て
是を一つ宛に二つ宛上へ向ふ形
元加き輪下タへ前に出て前の大輪
と同台になるを扱はく此上は撞木（シュモク）形
状にて木あり其先を前なる馬の胸の美
部に横木の左右に皮紐を付

手綱を引紀通しにして車代臺板のうし
代右角の後の角に板まくを横木代と申
代右に別の綱を付て手先きかける馬を
施し又手綱を引通して後の馬の右
いの一所の後に置事板の下に先き馬
の足をもつくみ付る足を御代
乗者は車代臺の前に掛る腰掛を掛
打付手先代前に洞の板をうつ事也

二色の手綱を掛ける所にて其の数
足の馬代口に付事ゆる綱を一所に
もち引て扱ふ板人の駕籠の
囲ハ無鮫皮張りにて囲ハ高サハ車上
乃臺板より座敷まで立居人のとゞく
程の窓ハ前に二ツ後に二ツ位の方ハ
小なり共に有る板あてるを屋上代
前に出れ乃ち人へき皮あり風雨共良ハ

たれを下し、たれを巻くも、人の食らいたる
なり。あり戸は外へ開く。巻を開けば、内に
仕切りありて、巻を開くと、門みな疎隙を彫る
屋敷、胴板扉門、御殿のごとく、乃至
又囲の外落の方に、出張りたる木あり。從
者は、乃至四本の級屋上より、乗
出し、胴を持ちて立乗る。騎馬の
人は、先を立て、馬の胴の前に跨がる

先きへ、乗手、乗手、乗手は
道中北前、南方之地、乗は車、茶は椅の
うへ、本に下るなり。又たた右入口前に
胴板を仕切、三重、其時は、こうもりたた
羽織、下へ下へ、垂れ、車ちちの
泥上を防ぐなり。
此所、廣き、囲は車の板、弱の
車、乗と同しく、乗て、無略なるのみ

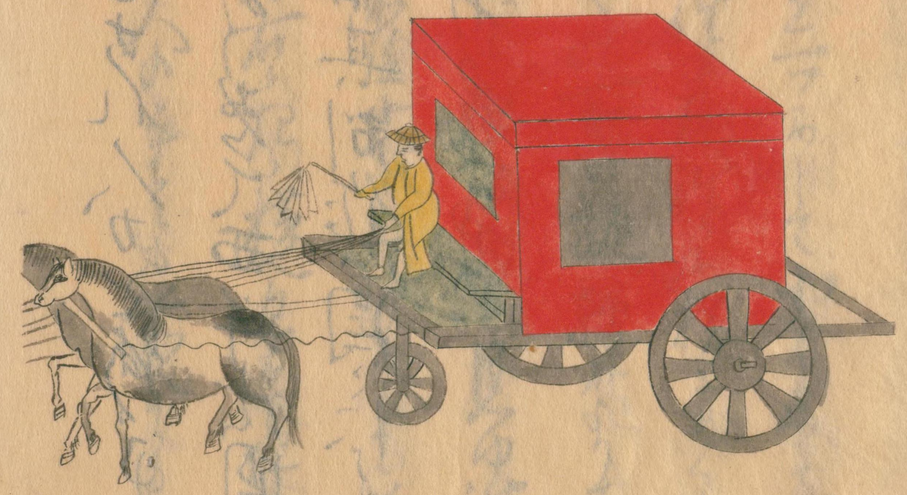
上海

又前此車輪を一つ乃至二つ小く造り其形
一人乗車なれば後に傍よりめぐらさん
とす依て此前の旋轉かゝりて自然
なる形を工夫し其物を見て後其車
はかくなれば大小三輪かゝりて前の小輪
の廻轉かゝりて左右に横に自然さ
間うかゝる人の手を前へ出す為後輪

輪をかゝすむすれば人力を使ふのみ
て筒使の利あり考て西洋法國の車へ
三輪とゝの唯其制作に異なるのみ
一つ其へ有る趣なり

車圖

車馬圖



国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1

ガラス使用

同月八日　六十里程　彼里程、糸ヶ岳駅場也
けるを馬後代ゆき名ふ美　一ヶ所名　岩屋
ゆと御出し京の所に見ゆ
八月日行事不の所に　九支清水病気
こ人車馬ゆの外法ふ所車ゆ破れ
出ゆ道ゆ次平坦ゆ　左右山ゆ
山ゆ　桜木　松ゆ　梅の木ゆ　形状あ巻の詳す
同九月日　武百里程　名ふ　人　九支清水

人病体弱ゆ旅ゆ中　歌舞ゆ趣ゆ後人　驚
養ゆ取残し　亀岐ゆ　進ゆ物　進ゆ形
進ゆ先ゆの道中ゆ　外便ゆ及ゆ
病気ゆ及　快方イルコーツカ　道ゆ席ゆ
道中ゆは　宮殿車ゆ走ゆ　食物ゆ　バン　車上
ゆて給仕ゆ用ゆ外ハ　ゆ中　ゆを急ゆ法ゆ
宮子兼に　ゆ日ゆ年　地名ゆ　ゆも　ゆ
仕れゆ　ゆ　千里ゆ中ゆ

カラスナヤリツケよりて所へ着

けれ漢字を書れ所の駅馬の役人何り掛

合の事も作法を見届居けれそのま

ゝ中は人家も繁昌仕イルコーツカ迄は

世話役弱代官有る地ハ郷学と唐言

必ず来て迎ひなり川あり名ふ覚牛肉

魚類共市店を多く見へ牛肉ハけれり

イルコーツカより巻末に図下ハ

けれ地の伴流

列より帰ハ

一如之巻山ハ雪ニ成さりし試之に

ありて車ハ雪ありて川ハ氷へ

解けかゝる道程ハ次第に次第ニ

寒氣もイルコーツカより強く成

一昼夜ニ車ハ之を百三十里又百三十里

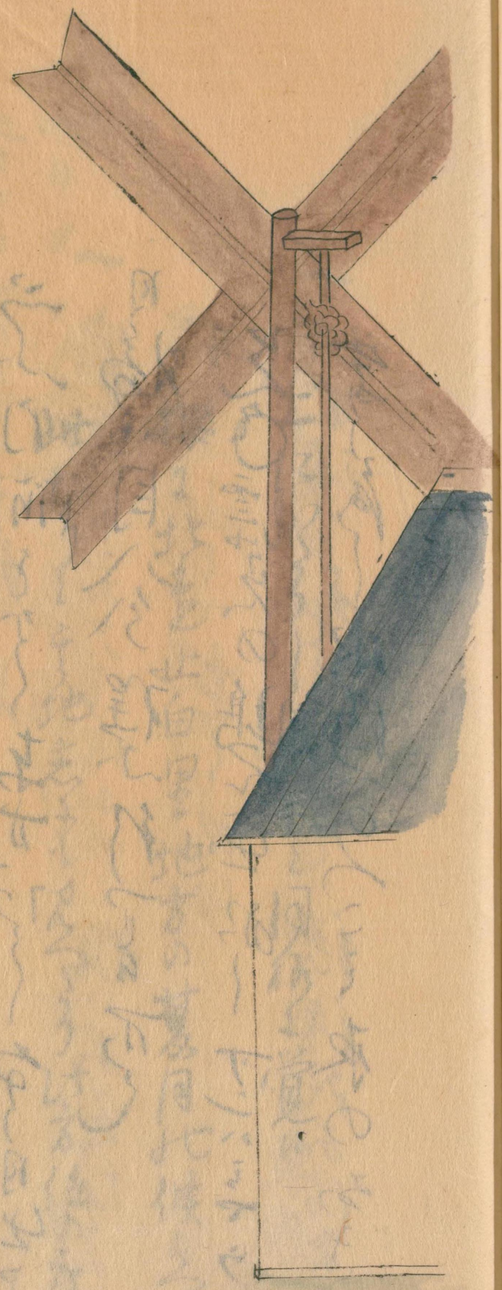
ハ乗ること多く

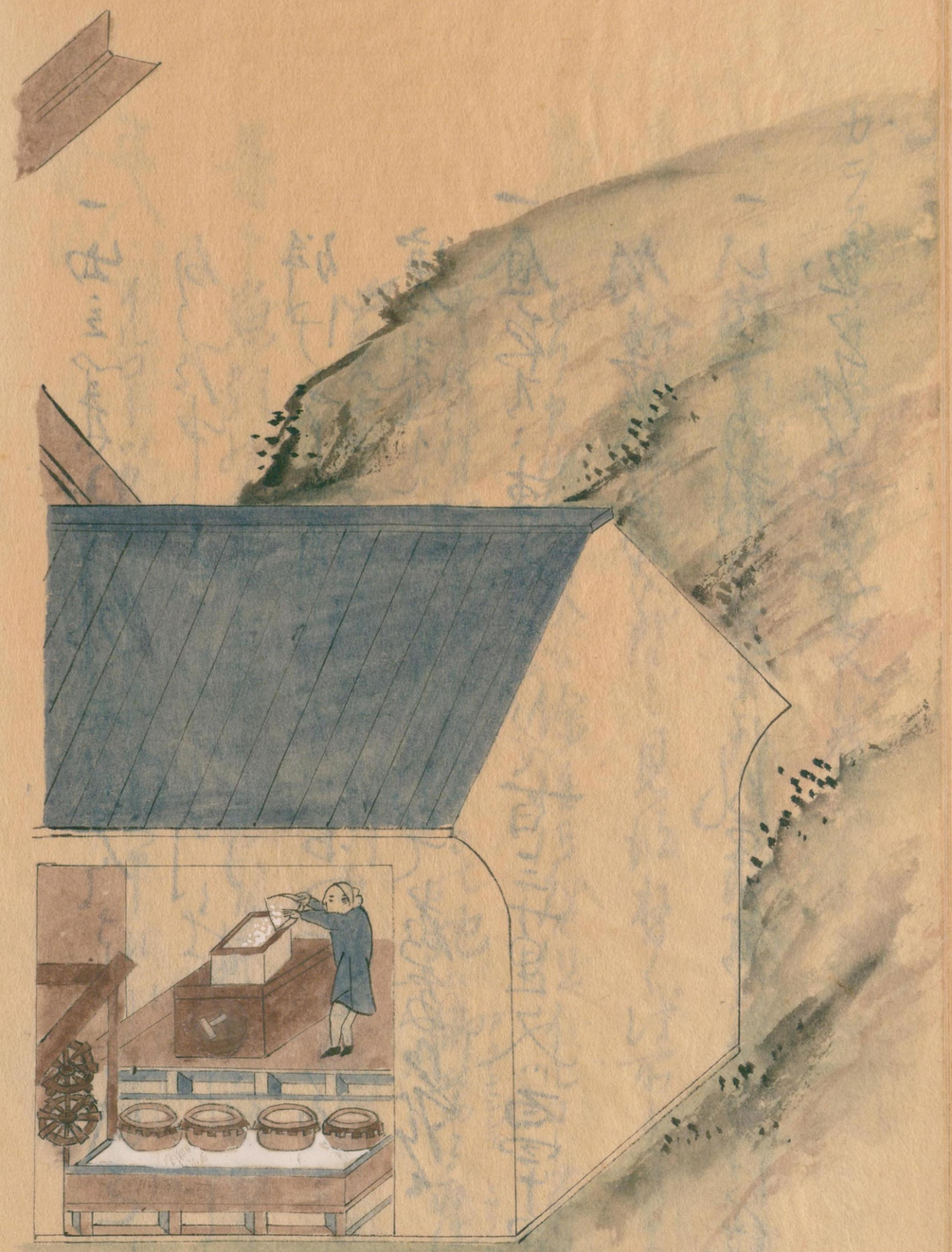
一ばいより新ニ換セ

氣ハ之を見受ケ

風扇之圖

いわの名家定
岡沢と風扇
名ぢく





国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

此度十月廿四日ニ
孫兵衛
一切所ニ而四月ニ入ル
春ニ成程一七日ニ
京門間ニ成ル東ニ
月海ハ目八分程ハ
之ニ潮見の島と出ル
家ニ成ル水海の
此ハ
上ニ
按ニ北ハ止白里地方の
此ハ
ハ
又此所ニ
ドンスケ
一タルタリヤの商客
雜居の
上ニ
此ハ
ハ
又此所ニ
ドンスケ
一タルタリヤの商客
雜居の

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

一韃靼人ハ眉毛ハ白く頭髮ハ天窓(アタマ)髮頭(ボーウ)
なり帽子ハ頂形ニ成て

其上ニ冠あり
相夫ヨリイルコツツカヨリハ二千里程あり也
コサクニホルカと中間也
一家造りドンスケ同様にて数ハ多なり山
形ハ山くハ高く見ゆ
一山形ハ高く高く高き高き陵陵社あり
炭を山のごとく積み其上に車の上
ハ拾ヶ丈程にして
ペリマ
と云所ハ昔此所ヨリペトルフル迄二千
二百里程あるといふ
一人家皆石造りにて所家も美麗なり
巾ハ皆ヨリハ廣さ一信も有て四方ハ開き
ヶ所地也魚類甚多く價も大変安
シヤテヤ抓も見ゆ鰹のごとき大魚なり
抓魚の類なり

けぢの彈後前より歸れ

一銀三朱一匁より大熱あて却所影安小疱を
發し面目甚だ甚く麻疹のごとき病
狀なれども其ゆえ呼吸(イキキレ)但迫強く藤門難
叶けれ共多く平金治療却下老道
已而併其横已弱しうう

天後狂三郎死業の報たうかく生狂
府出立の近安君おらんイルコウツカか

立の近彼地麻疹流りせしう必以狂三郎
も麻疹にて攻へきと皆く中れ
けれ共何里行きしや弘覚
と中れ共

ガサニ

郡家抱て石造りあてべりて同石甚く整き
北城下なり町の入口より北見坐の記
橋門あり尤代官所なり
けぢ夕ルタリア北四城の也城の前より方向を

三里ばかりあり城の石垣堅固にて高く築き
て見あげてみるに石垣の上に塀あり
甚だ堅固にして壮麗なる城門あり
又家々皮革にて葺き
一と少き価も銭にして数百貫
出ず価も心安しとや見て国に帰せる者
を見るに皆こもかぶりの皮にて包まれ日本
のものに比べ出来たる我邦商人出来を以て
て見るに車の損破せしを以て新たに造り
夫人一人逗留し十五日位夜中出入多門
の番人多く見るなり
撥手ガサシと云ハ力士なり支那も加山
と云張せる沢山前に詳に録し
加山より千里程有りと聞く
ムスクワの大都府に四月出発と覚て居られ
公役所に帰り事有ると聞て一宿夫

は地却圖の如く廣く國王の親戚位の
人城代は廣巴町より枝百町御道の廣さ
車を曳程美へく通風のなき程縦横
共皆悉石なり都て巨巨敷石道
悉く石風にて花羅なり結構せし家も
多く殊に也間毎ある火番なり辻ツリカタ
異國にて下り長屋あり上ケ濃屋あり
所へ閉戸の燒却の如く表面に花多の彫物

も都せり見て准し家内の樽子諸道具も
皆美を尽せり食料は蒸餅牛肉(バン)鶏肉(豚)の
類石大抵同しく都て味格別の事
一城市の間見物いとし度と附添の役人に所
に付而寺院なりも子方程あり多く
見盡さんとせは二三年も掛るべしと云
新却ベトルブルクよりは大抵一倍も廣
廣しとなり

按ずべトルブルクは我里数二里程ありて
上陸ゆもハけ説あるよ也ハ四里四方もて
きる風平洋なる事は詳説あるべし
一町の全口服の方に高所有り沿岸の地岩
山形のごとく四面脆弱なる所也此所より萬
国及び諸国の大筒を長く重き石垣
を築上げ高く柱をたてし屋屋四方明敞
なる地ハ地蓋石はたの中より三拝並べて
長サ三間程筒の縁強き其四天五寸程
黄銅なり鏈にて繋ぎ置き重き鎖
自由に廻り其面物を仕掛ける所物を
大玉も平地右より並べ海より平ら
なる物なる也ハ悉く大造なる物なり
按平光寺より記に院口全体向平作し
平地を延引あり物先ずしは久中に出
三間平に見へ中に仏像あり物を安置

焔硝を引きた穴をこ
又按職方弁記モスコビア 條田大
號長三丈七尺一発用い第二石可容
二人入内掃除云ゝ
巨
けゝ所より十四五間も隔たる所に高き
遊撞(おしがね)ありて大穴の内に入る撞の抜差し
二三間能く元と丁中一和の左さは三尺程
廻る尾きり手摩(サスリ)なく磨き光る事玉の如し

内大筒
も是を元と穴の内圍い下壇(底)
厚さ四〇又穴の上北地廻りは四寸
四方の玉垣あり此大筒何年以前何の為
鑄たるか事分り難し国も尚ほ古奥
筒大鐘の和名は六七人ゝ番人附居り
掃き光美り記す大筒と同前に大隆々
昔は弱亜り焼落ちて隆は大地に
埋り今里居中に迷り居候よし

手間庫へ行て見物する事二時
大なる事言語を述る紀事を重ね日
本北国奥方面を事同る仕訳子音書
多之出小山北てくるお見つれ見ハ
二ケ国の名物と申及ハ彼国を奥国也
日本の四奥方面を陸奥四奥国をは
プートと中ハ大蘆の洋沒茶を歸れ

此大蘆有所の至所俗名小高キ所ニ三階建の樓

臺見つくり

樓を亡尼寺なるを光堂記聞ニ事寄
樓ムスクワ世ニ有謂ムスコビヤなり彼は
自称ムスクワ又モスコウとよぶ北極
地五十度ニなるの地と云唐土ニは
莫斯哥(モスコヒア)亜と言訳世界は帝ハムスクワ
都府の事を都城東府の名を以て金京
の都名も地名也金鄰地別の名ハ(オロシヤ)

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

なり近年我邦モスクワといふ是也
漢人ハ魯西亜俄羅斯。鄂羅斯。等の音
譯称名あり ムスクワは彼暦数一千三百年
我正安二年北狄ヨリ「ウラジメル」といふ
地より遷す都を迂せり 汗須ハ王国なりと
下れといふ王の代より 帝爵の国となる
ときに八十餘年事今のペトルブルカといふ地
ハ新都を建て王居とし 昔は遠都なる
蛮族を城代とし置き光業なる女
帝半年ヲ新四郎府に交ゆ居住事
しに今ハ新都なれば住居此方なり 便宜の
西地なる加ゆや精詳乃譯後列に録す
源人等汗都を一宿皆此間なるハ見聞
世界和万分の一といふ
汗都より新都まで七百里程の間都下のごとく
安居まで手遠くあるを以て法律嚴平

垣道となり所〻早濕の所い大丸ちを並べ
ちを置き數石を敷き平地はなきなしと
里の路程弦捧いふなりなし
路次の左右は曠原にて田圃いなし遠く山〻
見ゆ所〻なり道中川〻皆橋
を宿継北部〻も間を〻多く人家ほまし大道
なるも本作はなりけれ共雪はいまだ消
残りも見苦しく

北北方へ向ひて行くこと凡そ四月廿六七日比
ベトルブルカ北部府と上岩を
イルコーツカ三月七日發足北部府へ上岩
四十八九日と覚ゆ
按ずるに光堂の記するイルコーツカを立て道法
凡千八百二十三里を四十日ばかりにて
ベトルブルカに着す道中車馬あて昼夜百里程
つゝ走ると誠に目眩め手腸胃顛倒

うをもく捷なるものしの図引きり品ハ千
といふ人の車と図車せうけ車を駕籠
なる所甚だ平穏なるもの所跡
動揺なきなり此けるの制度極て
精巧三百金を費せしと聞きり
ムスリワすりハ七百里なりこてあて幾日間
如しなるもしらず覚つれ車をふとけハ一七日
ゐるときまり

イルコーツカ初立より以来七千里此道中
都邑村落数十余あるし昼夜此畢道
なるを見聞る眺めるさりしハ遺恨といふ
べし但往記しし事を抜萃ものの地名
右北一両所なりこれ皆地の澤なりて
を地形古俗の大略を別に録を
上着帰附添の役人高信某といふ人此館を連
れ出て此則ち此所の名長屋といふ所此二階

小さき旅亭となせり

こゝにいはゆるセナトルといふ官六人の手間をて
ニコライバイトルイチリュマンゾフガラフといふ
人の館はよゝセナトルは政務に預る人を
國老といふ事と同ゆ六人を同じ連ね
称せるとき民セナツケをいふ老中と
いふがごとき ガラフと云事を下にては
ら称称せるは六員の間二員ありてセナー

ツケ北間も格別なる事はよりなるゾフを
人々ガラフ〳〵と称せり中ガラフは
記せるはリュマンゾフの事なり
掌る和蘭の侯爵をカラーフといふガ
ラフ必ずしも事なるべきゝ
遠く海を隔てガラフは悉て外國のる
礼扱掌りなれも兼ねといふ由ゝ此度の日
本使役節は事兼に漂流人イルコーツカ

より岸登せしに事皆以人北亢も
人なりと見るによりて旅宿をも以館門
を定め常帰帆の節迄常留中以の取
扱まて懇ろ厚くもし世話を尽す
館はやがて町家の並にして廻り廣さ二三町
四方にして三重門なり第一は大門なり第二重門
南北脇に番炮を持ち左に番兵二人を置く第
三重北門は石を畳みこのを寺北唐門のごと
く

金色丸くして扉は板なりとて薙刀北亢を記
抜を肩に打越す拭に依者番を設し人
帰上へ出る者北亢を須をなすこと
同日晩道中百色余は役人指添何れもガラフの
前へ石出さる事右三門を経て先堂上へ出る
陰に階をのぼり三階の上にあるる毎階四面硝子
障子なり
かくのごとく四方硝子加へ前に今し人彩

ものを移すなり進て室内に
見と同じく大小の遠あるなり
其序上に墨子は猶子孫の画数を戰
家亦人物等の彩数くるけなること座敷を
ガラフ板敷にて其くに仕切あるも都合みていハ
我邦の畳にて二百畳位の廣さ有り
序
皆こと居並ぶ如くなる指図にて間濃み出
陪従役人等設にて引ガラフしハ ガラフ正面に

おつ手伯母なりといふ人も傍に側に出川陪従（ソバ ニ ハリ）
北者四五人其他女子僕ガラフ何也と人命釋を
て且問たしは各日本へ帰り後ド又此地に寄
居りし紀や何也共室内に可設に諸に此器
次第に出る扱拵たさ家ら 帝（ミカド）の思召也と
図の北図津美儀平左平太十郎義彦帝已御
六人の去ハ何年右図へ帰朝仕度をお答（ハ四人の）
者とも車ハ列に記れ ガラフ再び中されハ玉座左北車

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

なり我帝王ハ外国の人をもてなす事を思召相
別懇にも加へらるゝ事なれは各何事も人交
ゝ及ぶ所安意致し居候ものとなるべ中間也
ゝ

扨附ニコライ新蔵も来上しに付此度
同行し来候ハ来る言上為致列
席せしむ附添の役人を次第をガ
ラフに中出し相成にて皆一同通り御覧
新蔵別段に出委細の事も聚楽
一ガラフの服飾ハ上へハ云地色羅紗の羽
織のごとき物を着り金銀のきらを
を多くかけ下の方へ袴を着り表衣は見
留を後ハ同見へせし帝王の
ハ後と同様ハ見へ
一伯母君なりといふ人ハ日本人見
物のごとくめと思召ハ情来ハ遠く見
ゝ候ものなり后ハ正殿と同し様ハ覚ゝ

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

一 此度者使い役人従事子常日本
源流人石異し始末より記て手切
ゆ金を出り麝香美せ遣しとゆり
一 滞留中の賄見廻用いさ所猪猪なる胡
桃なり毎日二ケ度胡桃一遍の胡菓子
以外なりしの豆腐い料理一人前ゆ九遍
頂て後代へ出し食盤数脚を長方
上に並へ列ぬ給仕人附く賄ゆい料理

人参て吹くゆ仕方ゆ松茸なり
葱備ゆ添ゆ豚羹は塩水ゆ牛肉雞肉の
ゆ米をかし入る者ゆ煮ゆ所のもの
豚肉野菜菓に魚類種々あり
右羹ゆ外なる米を碗程を入て松
子之漂羹此度は初て米粒を食
料理大抵右のごとし一つい覚つを酒い一日
ゆ二度ゆ食時の時出し皆麦酸酒

なる色花風味甚て宜し尤蒲萄酒を用ひ

カラフト宅逗留中見聞の雑事

一館内人数七百人程ありて其地の人を百家世襲事と見て表通りハ大抵男子計り見受る婦人ハ少き色なり

一家地左右より影麦を運送する程なり

一虎(トラフ)斑或ハ紫色白色卵黄(タマゴイロ)色の石を産す四寸ばかり大さ壱尺ばかり程の割しる事

平壁机のごときあり脚ハ高く水を仍り性質北中に長く三尺ばかり出て書する時用ひる石の名ハ ムラくといふよし

此石長大なる事寺院の柱ほどある事を毎度見る外の細工物ハ法ばかりなる烟管形ハ制作用ひる事も見受る

一横文字ハ書籍も影麦を運ぶ事を見受る

一ガラフ出行ハ其ハ車馬ハ六疋馬先キ馬二疋ハ綱置ナリ従者ハ先キ供ノ人ナル屋ハ車ハ後ハ供二人附キ其ナリ外ハハ持セルノミ

一館内家宅ハ中ニ草花ヲ養ヒ一和ヲ中ニ煙草ヲ好ミ其他ハ通ヒ乃囲碁ヲ好ミ囲碁ハ時ニ温暖ノ温加減ヲナシ花ヲ開ク実ヲ結ブ

枝ヲナリ其五月比ニ覚テ桃ハ其地ノ実ヲ結ヒ冬ニ至リ此国ヲ見ル古地数年ヲシテ花実ヲ見ル寒国ハ人ノ家ノ内ニ咲キ花ハ咲ヒ事ナキヲ開ユルヤ

一五上ハ日見ハ其ハ日本服ヲ用ヒキヨ此一加行ノモノ其古ノ一和持ヲ仕度ヲ以ハ其ヲ「ヲスタノコレゲ」ト云ヒ役所ヤモ其ヲ

また拾人前ゆきたを寸法をうたう
そ後又仕立出来うとて高九郎行きあ
度け役所へやらたう高儒子孔着物等
拵織常等なり

一皆うお行の時い毎度車馬ゝ駕せうう四
人乗りまて鞭を外も鞍(クラ)を飾り玉簾
あ作りうは車なう四足馬あて家ハ車
北ゝいのゝ孫を流し皮をうう車をめた

中ゝくうは板なるこうは車搏動しても
ひぐうぬ板なうは中ゝのゝ四方ハ硝子板
あて外の見へ透く板よし平間あハ菌(シトケ)を
志記ゆうい黄変磯物あてうは幡(輾)の上あ腰
是ゝこうは御者鞭をうけ鞍のうき物を
ゆうる足をうは乗車北後ハ供二人うう

一ガラフの別荘見物行きう事あり陽変
事を多ゝ乃事なう高敷なうを中

見列するに孔雀なども高い建物
物性に世に奇異なる物も数多あり此所は
帝王の御苑の西に当りカナスダと云う漢
も見ゆる所なり

一図は北軍船なる百人乗りなるとかの是
駛く見るに長サ六十四尋程巾右衷の
方ともに石火矢の窓所二階作りなり
櫓は第一階の上に舟廣に狭又は石

を法むこれ舟尾を高く造りとめ
を上には兵粮并に数千の水桶をたく
さん仕切を有て舵を丸形と軍兵の
居る所とあり彼北舟作りは短(ニクハ)瓜を割
るごとき形なり
此軍船北車の張り記事を家形之雑
事篇に載せ有るに茂貞の記事也
尚之此時他の雑説を以推究す遑

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

ゆゑに今この事を見るに一事あれの事
を録せぬと思ふは雑事篇に出せる
舟の図は帰帆の船中にて彼人曰汝等
既に見る所の我造舟の器なりと雖
ども一艘に二百七十人乗るとあり百人
のり等は遠ひ意なるべし再問ひ
て推し決し如くあるを挙
げて他日の校正を待んとす

一 此館中にて人々いひしは今より七日
前より此都より南に此国を開きの
太祖の百年忌にて大祭ある有り詩
按に魯西亜記譯後に伯多琢(ペトル)第一
世此祖彼一千六百七十二年(我寛文十二年也)誕生
一千七百廿五年二月殂(享)ときは則我享
保十年なり(享年六十四歳と云)此祭庚辰は八
十年なる故此は百年忌といふ

凡一千七百餘年の間
癸亥より一百年ばかり漂人傳聞する所
他の系事先代の誕辰なるを祭
あいかつらやの一脉年忌を祭るとぶ
いなき趣あも聞也
又其國徳を敬享保十年曆數一千七百廿六年
あ何ゝてゝ此地を彰み造建まるとぞ
されば此年より八十年に及ぶ或ハ

偶数を設ふる孔祝事もありしや

環海異聞卷之九終

862
1

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1

ガラス使用